

特集：本シェルジュ6.0——ビジネスのさまざまな悩みにお応えします

エピローグ 雨はいつか上がる



村上 知也
神奈川県中小企業診断協会

本シェルジュの執事が持ってきたのは、次の本だった。渡は暖かい光に包まれながら、ページをめくり続けた。

自分の小さな「箱」から脱出する方法



A・インスティテュート 著
金森 重樹 監訳
富永 星 訳
大和書房
四六判 280頁
本体 1,600円＋税

「君には問題がある」。会社の幹部からいきなり言われる主人公。はっきり言って同じ場面に出くわしたら、いい気はしないだろう。「たしかに、私の部署にはさまざまな問題がある。でも、それは私の問題ではなく、上司や部下のせいなのに…」そう感じているあなたは、もう箱の中にいる。心地よい自分を正当化する箱の中に。箱から出るには、どうしたらいいのか？ 人との付き合い方、自分との向き合い方を考えさせられる1冊。

執事のようなマスターが、バリトンの効いた声で重々しく語る。

「失礼ですが、上山様は箱の中に入っておられる。それも、とても奥深くに」

「でも、課長も後輩も、俺に対して意地悪なんだ。俺が失敗するのを待って、あざ笑うんだよ。客も、俺のことをバカにしているに違いない。これじゃ、閉じこもりたくもなるよ」

「上山様は、笑われたいのでしょうか」
「そんなわけないよ。誰も好きで笑われたくなんかないよ」

「そうでしょうか。上山様は、課長や後輩を意地悪なやつと決めつけることに喜びを感じてはいないでしょうか」

「いじめられて喜びなんか感じないよ」

「では、課長が優しく接してくれたら、どう思われますか」

「あんなやつら、俺に優しく接するわけがない。心の底から意地悪なんだ」

「そうでしょうか。やはり上山様は、課長や後輩に対して文句を言うことで満足されていないのでしょうか」

そんなはずはない…と言いかけて、渡は自分自身の中で考えてみた。

たしかに、俺は課長を意地の悪いやつだと決めつけることで、安心してたのかもしれない。俺が文句を言われるのは、課長の性格の問題で、俺のせいではない、と。ん？ そもそも箱って、何だろう？

「自分を守る箱に入っていると心地よいものです。でも、その結果、悪いのはすべて相手だと自分を正当化していませんか」

「…俺は悪くない…悪くないけど、成果を上げられていないのも事実だし、俺にも足りないところがあると思う。でも、それにしたって、ちゃんと課長に向き合おうにも、向こうが相手にしてくれないし、俺はちゃんと仕事してるんだよ」

「上山様は、仕事をしている自分のイメージを持ち歩いているだけではないでしょうか」

「そんなことはない！ 後輩より俺のほうが知識は豊富だよ。後輩の高井なんて、住宅の細かい工法のことは何も知らないんだから」

「知識が豊富だという自己正当化のイメージを持っておられますが、本当に知識が豊富なのでしょうか。それでは、知識が豊富な上山様が、後輩から新しい情報を教えてもらったら、どういうふうに感じますか」

「高井から？ 教えてくれるわけがないよ。でも、もし新しい情報を教えてもらっても、余計にイラッときちゃうと思うな。何であいつから教えてもらわないといけないんだって」

「では、そういう態度の上山様に、新しいことを教えてくれる人は現れるでしょうか」

「…誰も教えてくれないかもしれない」

「それでは、上山様はいつまでも知識豊富であり続けることができるのでしょうか」

自分では知識がたくさんあると思っていても、実際には他人に教わろうとしていないから、新しいことをまったく把握できなくなるということなのか…。

「上山様は、箱の中に入っておられます」

「だから、その箱って何？」

「上山様は、さっきから何を話しておられましたか」

「…会社の人間の不満を言ってるよ」

「そうなんです。箱の中に入っていると、相手を責めてばかりになってしまいます。それは意味のある行動でしょうか」

「たしかに、会社の人がないときに悪口ばかり言っても、まったく意味がないよな…」

「上山様は、課長や高井さんを責めたいだけなのではないでしょうか」

「そんなわけはないよ。俺だって仲良くやりたいし、助け合いながら仕事ができたいいなって思ってるよ」

「それでは、どうして自分の思いと逆のことをやっているのでしょうか」

「…え、どうしてだろう…？」

「それは、自分への裏切りではないでしょ

うか。自分は責めたり悪口を言ったりしたくないと思っているのに、違う行動をとっておられる。まさに自分の思いを裏切っていませんか」

たしかに、そうかもしれない。自分がうまくできていないことを棚上げするために、あの2人のことを必要以上に敵視してしまっているのかもしれない。そして、自分がこんな態度だから、余計に冷たく当たられるのかもしれない。どうしたらいいんだろう。

「どうしたら、このややこしい“箱”から出られるんですか？」

「上山様は、もうわかっておられるのではないのでしょうか。誰かに対して箱から出て接したいと思った時点で、もう箱から出ているんですよ。相手のことを考えて、相手の立場に立った場所は、もう箱の外でございます」

…何だか、わかったような気がする。いままで、自分で自分を箱に入れて相手のことを考えないことで、自分を苦しめていたのかもしれない。相手のことを考えようとするのが、箱から出ることなんだ。さっきまで重々しく感じていた肩の上の空気が、少し軽くなった感じがする。

「そろそろ会社に戻って、課長や高井君と話してみるよ」

マスターは、何も言わず渡を出口へと案内し、重みのある扉を開けながら、渡の顔をじっと見つめる。ポーカフェイスだった顔に、少し笑みがこぼれる。

「カフェに入っても、箱には入るな、ということでございますよ」

渡も思わずにっこりしてしまう。

「ありがとう。簡単にはいかないと思うけど、なるべく箱の外にいるようにしてみるよ」

すっかり晴れ上がった夕焼け空が広がっていた。カフェに入る前の土砂降りの雨が嘘みたい。空にも渡の心の中にも、暖かいオレンジ色の光が降り注いでいた。

本シェルジュカフェ。また、迷ったときには来てみよう。

(おわり)